

遠隔交流学習での地域学習と地域教材の構成【1】

－ 気付きを伝え合う学習における地域教材の構成 －

Study on process of the acquirement of knowledge in the education of Finland

米須智子*1／岸本春海*2／二ノ宮のり*3／久世均*4／齋藤陽子*5

児童にとって地域とは、家庭や学校と同様に大きな学習の場である。地域やそこに住む人々とかかわる中で地域の歴史や習慣などを知り、理解することで地域への愛着が徐々に高まっていくものとする。那覇市の石嶺小学校の校下に住む子どもたちは、これまで互いにしっかりとかわり合いをもち、自分の住む地域に愛着をもって生活してきた。しかし、平成20年度の全国学力・学習状況調査児童質問紙の調査結果によると、一般的に児童の地域への関心については、あまり高くないことが明らかとなった。その原因として考えられることは、児童の地域とのかかわりの希薄化や地域のよさに気付くという経験の不足などが考えられる。そこで、地域性の違いを生かした遠隔交流学習を行うことで、地域の文化の理解を深めるとともに、コミュニケーション能力を高め、自ら学んだことを、整理考察する機会にする為に、簡易なテレビ会議システム（Skype）とタブレットPCを活用することで、リアルタイムでの交流が可能になり、意欲的に取り組むことができると考え実践したので報告する。

<キーワード> 地域教材, 遠隔交流学習, 地域たんけん, 気付きを伝え合う学習

1. はじめに

小学校学習指導要領生活科学年目標(1)には「自分と身近な人々及び地域の様々な場所、公共物などのかかわりに関心をもち、地域のよさに気付き、愛着をもつことができるようにする」と示されており、児童が自分の住んでいる地域に愛着をもてる指導が求められている。

従来の生活科の実践を振り返ると、児童が行きたいと思う場所へ行き、遊んだり取材をしたりするなどのかわりをもち、そこで得た気付きを紹介し合うという活動であった。訪問先とその後継続的なかわりをもったり、一人一人の気付きを基にして地域にはどんなよさがあるかを確認したりするなどの学習活動は十分ではなかった。そこで、地域のよさに気付き愛着をもつ児童をはぐくむ手だてとして、まず今回開発した地域の社会科デジタル教材を積極的に活用し、事前に地域への興味・関心を高め、そして地域を探検する活動（地域たんけん学習）を行い、地域にある施設やそこで働く人に焦点を当て、しっかりとかわりをもつようにする。さらには、他の地域と自分の住む地域

のよさを比較し、自分の住んでいる地域のよさを確認し、気付かせることにより、地域への愛着を深めていきたいと考えている。具体的には、全国に広く導入された電子黒板を使って遠隔地にある学校との交流学習（気付きを伝え合う学習）を行い、環境の異なった学校との交流を通して環境の違いや互いのよさに気付かせることに寄り、地域を楽しく深く知ることができると考える。今回、生活科の学習内容項目(3)「自分たちの生活は地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所とかかわっていることが分かり、それらに親しみや愛着をもち、人々と適切に接することや安全に生活することができるようにする。」および(8)「自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行い、身近な人々とかかわることの楽しさが分かり、進んで交流することができる。」の2点の内容において、ICTを積極的に活用しながら、地域で働く人とかかわりや遠隔交流学習の工夫を行い、気付きを伝え合う学習活動を取り入れることにより、地域のよさに気付き、愛着をもつ児童を育成したいと考え

論文受理日：平成23年9月23日

*1 NINOMIYA Nori *2 KISHIMOTO Harumi *3 YONESHU Tomoko *4 KUZE Hitoshi *5 SAITO Youko :
岐阜女子大学

ている。

2. デジタル・アーカイブによる地域教材

(1) 文化遺伝子の基本情報

地域情報は地域の財産であり、地域で活動する住民にとっても、過去と未来をつなぐ知の集積として記録され、活用され、発信される価値を持つものである。それらが、地域のコミュニティをより豊かにし、新たに人と人、人と地域をつなぐ触媒として地域に輝きをもたらす。ここでは特に、子どもたちによる「地域たんけん」を通じて地域の文化遺伝子を再発見するものとして実施した。

地域の文化遺伝子（ミーム (meme)）とは、文化を形成する様々な情報であり、人々の間で心から心へと伝達や複製をされる情報の基本単位を表す概念で、動物行動学者、進化生物学者であるリチャード・ドーキンスが、1976年にThe Selfish Gene（邦題『利己的な遺伝子』）という本の中で作られたものである。

各々の地域では、有史以来、経験し、蓄積してきた多くの歴史的事象が存在する。その中でも、地域の人々により、時には労力を出し、資金を出し、精神を発揮して、これら歴史的事象を、祭りをはじめ、民俗芸能、遺構、伝承、あるいは町並みなどとして、大切に守り育て、受け継いできているものがある。このように数ある地域の歴史的事象の中で、地域の人々によって受け継ぎ、守り育てられてきた「地域固有の精神文化」こそ「文化遺伝子」である。そこで、様々な地域文化のうち、（主に明治期以前から）長い年月を経て、守り受け継がれてきている「地域固有の精神文化」に着目し、これを「文化遺伝子」と定義した。ここで、文化遺伝子の基本情報を次のように構成した。

(a) 主題となる資料

(例) 主となる文化財の映像の収集（撮影）
資料の構成（例：獅子舞、踊り方）

(b) 歴史的背景

(例) 主題の歴史的背景について調べ教材化、（例：首里城、エイサー、伝えられた背景状況、歴史的資料など）

(c) 地域の人々の話

(例) 地域の人々の思い、専門家の研究等の記録（例：オーラルヒストリー）

(d) 関連資料

(例) 他の関連文化財（活動）、説明資料など

地域の歴史・祭り・文化資源等が現在にまで残り、受け継がれているのには理由があり、受け継ぎ、守り育てるために様々な努力（取り組み）がなされている。このように「文化遺伝子」が地域住民の中で共有できている地域においては、時代が変わり、社会システムが変貌しようとも、今後とも個性ある人づくり、地域づくりが継続できるものと考えられる。更には、地域の文化遺伝子を持った人々により地域づくりが行われていくことは、これからの持続可能な社会の形成、豊かな人の感性や作法を生み出すばかりではなく、地域コミュニティの再生・活性化、観光や新産業といった地域振興にも大きく寄与できるものである。ここでは、小学校の地域情報を収集し、Web化するにより、各地域の社会科デジタル教材を作成した。

(2) 地域情報の構造化

地域情報は地域の財産であり、地域で活動する多様な主体にとっても、過去と未来をつなぐ知の集積として記録され、活用され、発信される価値を持つものである。それらが、地域のコミュニティをより豊かにし、新たに人と人、人と地域をつなぐ、触媒として地域に輝きをもたらす。このために地域情報の基本となる地域資料のデジタル・アーカイブを行った。

沖縄地域文化資料（活動）のデジタル・アーカイブの基本構成として、次の4つのカテゴリーに分けてアーカイブした。

(a) 生活文化（衣・食・住）

①先人・教え

- ・地域ゆかりの偉人の業績や教え。
- ・歴史上の人物のゆかりの地であること。
- ・地域ゆかりの組織（例えば地域の歴史文化を継承する人々など）。
- ・歴史上の人物個人ではなく、これら人物を多数輩出してきた地であること。

②地域文化

- ・地域独自の生活文化を現在まで受け継いでい

ること。

- ・地域の長い間受け継がれてきた教えを現在まで受け継いでいること。
- ・歌（和歌や俳句、連歌など）が多数読まれた地であることや、これら文化に関連の深い地であること。

(b) 伝統文化

① 出来事・発祥

- ・歴史のターニングポイントとなるような出来事が起こった地であること、またはその出来事に由来する史跡等が存在すること。
- ・文化的な事項（音楽など）の発祥の地であること。

② 拠点・要衝

- ・各時代における地域の中心・拠点として繁栄した地であったこと。
- ・交通や物流の要衝として繁栄した地であったこと。

③ 町並み・史跡

- ・歴史的な建造物や構造物、町並みが残っている、またはこれら資源を守り受け継いでいること。
- ・歴史上価値の高い史跡を有している、またはこれら史跡を多く有していること。

④ 伝統芸能・祭り

- ・風俗慣習や祭礼行事、民俗芸能を現代まで継承していること。

⑤ 神話・伝説

- ・日本創生の神話や諸伝説にかかわる地であること、またはその神話・伝説に係わる史跡等が存在すること。

(c) 自然

- ・地域の自然
- ・沖縄の自然の風景や風物

(d) 産業（農業・林業・かさ・まゆびな・工芸品など）

- ・日本を代表する産業や伝統工芸が興った地であること。
- ・近代産業の中心地であること。

この地域情報を基に、先に示した地域の文化遺伝子の各基本情報（メタ情報）をまとめることが必要となる。



図1 地域教材 TOP ページ



図2 地域のむかしのページ

3. 教育の情報化によるICTの方向性

文部科学省は平成23年4月に「教育の情報化ビジョン～21世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指して～」において、2020年度に向けた教育の情報化に関する総合的な推進方策を提言している。

このビジョンの中では、学びのイノベーションと称し、情報通信技術を活用して3つの学びを推奨している。

- (1) 一斉指導による学び（一斉学習）
- (2) 子どもたちの一人一人の能力や特性に応じた学び（個別学習）
- (3) 子どもたち同士が教え合い学び合う協働的な学び（協働学習）

情報通信技術は、時間的・空間的制約を超越することができ、また、双方向性を備えていることなどがその特性として挙げられている。空間的制約を超越し、他の地域に住む子ども達と協働した学習を行うことが可能なのである。このことは、ビジョンの中でも示されており、「情報端末や提示機器等を活用し、教室内の授業で子どもたち同士がお互いの考え方の共有や吟味を行いつつ意見交換や発表を行うことや、学校外・海外との交流授業を通じて、お互いを高め合う学びを進めることなどによって、各教科等の目標の実現や内容の習得に資するものである。」とされている。

また、教育の情報化は、次の3つの側面を通して教育の質の向上を目指している。

- (1) 情報教育（子どもたちの情報活用能力の育成）
- (2) 教科指導における情報通信技術の活用（情報通信技術を効果的に活用した、分かりやすく深まる授業の実現）
- (3) 校務の情報化（教職員が情報通信技術を活用した情報共有によりきめ細かな指導を行うことや、公務の負担軽減等）

教科指導における情報通信技術の活用においては、「教員と子どもたちが相互に情報伝達を図ったり、子どもたち同士が教え合い学び合うなど双方向性のある授業等を行ったりする場合にも有効である。」と示されている。

4. 遠隔交流学習

遠隔交流学習は、「気付きを伝え合う学習活動」を中心とした学習であり、そのねらいは、

- (1) 地形や気候の条件から見て特色ある地域であることを伝え合うことにより理解する。

- (2) その土地の環境に適応しながら生活していることを伝え合うことにより理解する。
- (3) 伝え合うことにより、他地域との比較から自分の地域社会の生活を考え、見つめ直すことにある。

ネイサン・シェドロフは、人間がデータを得て、どのように理解し、知識や知恵に変えていくのかといった流れを、「理解の外観」として表している。「人間は五感で得たデータを、それまでに有したさまざまな知識や経験を用いて情報として取り込み、それをさらに伝え合うことにより、構造化された知識、さらには知恵にまで高めていく」と述べ、知識を深化する場合、発表又は「気付きを伝え合う」ことが重要であると指摘している。

今回は遠隔交流学習のプロセスとして以下の学習を行った。

(1) 自己紹介の交流学習（9月）

お互いの交流する小学校から、子どもたちの自己紹介カードを郵送した。一人ずつの名前と写真があり、紹介の文面も地域の内容を盛り込んだ楽しいカードとする。さっそく、石嶺小学校でも、グループごとに写真を撮り紹介文を書いて佐見小学校に送った。子どもたちは自分たちの生活から地域の特徴を少し意識させることができた。

(2) 相手校(地域)の様子を調べる学習（10月）

各交流する様子を前述した社会科デジタル教材で調べる学習。遠い地域の様子がすぐ分かるインターネットのよさを少しずつ理解している子どもたちであったが、実際に交流することになった学校のことはさらに意欲的に調べることができる。また事前に相手校から送られてきた資料を子どもたちに検討させこれらの質問を考えさせた。

(3) 「地域たんけん」マップづくり学習（11月）

地域の調べ学習をして、「地域たんけん」マップづくり学習をした。既に小学校では、模造紙を使い、表したいことを絵と文で表す学習を低学年から行っている。子どもたちは、たくさんの調べ学習から、地域で一番心に残ったことを表現した。また、子どもたちが、それぞれに選んで資料を作るため、探検する場所も様々と

なった。子どもたちは、自分たちの考えを自分たちの言葉で表現し、グループ毎に模造紙1枚にまとめ、これらの探検マップは、お互いの相手校に送付し、教室の後ろに掲示して事前学習とした。

また、探検・地域の様子を写真やビデオで記録した。それを編集して、地域のくらしの説明用DVDを作った。多くの写真や長時間のビデオの中から、3分間に纏めるのは大変である。子どもたちの資料は、心に残ったことの箇条書きのような形であり、ビデオは作文のようにつながりが必要である。子どもたちの資料をつなぎながら、教師が中心になって進め、ナレーターは子どもたちという形にした。

(4) 気付きを伝え合う学習活動(12月)

平成23年12月2日(金)佐見小学校と石嶺小学校が子どもたちと「気付きを伝え合う学習」活動をした。

お互いの小学校の資料を元に、地域の紹介を伝え合う学習活動を行ったが、子どもたちは絵や文だけではなく、写真やグラフを使っただけの資料は分かりやすいと考えたようである。他の地域と自分たちの地域を比べることで、自分たちの地域がより特徴のある地域と感ずることができた。子どもたちも写真や実物を使って分かりやすく話そう、説明しようという方向になった。

子どもたちは、自己紹介をした後、地域の探検マップを使って、地域の紹介だけの交流と思っていたが、習い事や遊びの話の交流に進展し

た。距離的には遠く離れた岐阜県の佐見小学校が、すぐとなりの教室のように感じ、楽しく話しかけることができた。

(5) 質問に答える学習活動(12月)

各校から送られてきた「地域たんけん」マップの作成と「気付きを伝え合う学習」活動後、子どもたちに質問したいことを出させた。どの資料や伝え合う活動も、とてもうまくまとめられているが、説明してある言葉が分からなかったり、簡単なことが意外に分からなかったりする。自分たちへの相手校の質問も、こんなことが分からないのかと自分たちの思いこみに地域の違いを感じた。自分たちにとって当たり前のことが、他の地域には分からないものである。他校の質問を受け、自分たちの地域をもう一度見直し、分かりやすい答え方を考えることができた。

遠隔交流学習によって、子どもたちの表現力は大きく高まる。自分たちの学習のまとめもうまくできたが、他地域からの資料を見て、よりわかりやすい資料を作ろうと、相手を意識して作ることができた。また、子どもたちは自分たちで描いた絵と写真の使い分け、グラフや表の大切さなどを学ぶことができた。

遠隔交流学習を行うためには、期日が決められ、資料の提出日が迫る。体験学習、見学学習は天候や行事の関係で、予定通り進まないことがある。そのときは、子どもたちに慌てさせ十分考えを纏めさせることなく、どんどんつめこませる形になる。十分なゆとりをもち、子ども

単元名	町となかよし		
小単元名	主な学習活動	交流学習	留意点 ○交流学習の留意点
町となかよくなるう	【ねらい】 町の人々や好きな場所、公共施設などのかかわりを広げ、石嶺小学校に伝えることを知る。 ・行ってみたい場所について話し合い、グループごとに役割分担をする。 ・探検する場所を地図で確認し、調べてくることを話し合う。 ・行き方や持ち物を決める。 ・訪問場所(予定) 道の駅、床屋、コンビニエンスストア、福祉作業所、ガソリンスタンド、治療院、歯科医院 ・ルールやマナーを確認する。 ・約束を守って楽しく探検する。 ・調べて分かったことをメモしたり、施設などの写真を撮ったりする。 ・探検して気付いたことをカードに書いて振り返る。	・自己紹介カードを交換し合い、自分の交流相手を確認する。 ・ビデオレターで自己紹介や学校の紹介を行う。 ・自己紹介の感想をFAXで交換し合う。 ・写真や「見つけたよカード」をホームページに蓄積し、いつでも見ることができるようにする。	・名前と顔が一致するような掲示物を準備する。 ・2度同じところに探検に行く。1回目は施設そのものに焦点をあて、その秘密に気付かせる。 ・質問したいことや見たいところをチェックさせておく。 ・道具やバックヤードなど、普段は目につかないものや気付かないものをよく見てくるよう助言する。 ・事前に写真を撮影する練習を行い、目的に応じた写真撮影ができるようにする。 ○発表の際のポイントである大きな声で言う。前を向くなどを確認する。 ○手紙を書く際は、発表の仕方のよかつたところなどを見つけて書くようにさせる。
町のひみつをつたえよう	【ねらい】 町探検で気付いたことを発表し合い気付きを高める。 ・気付いたことをグループごとに整理する。 ・1枚の色画用紙に1人1人が書いた「見つけたよカード」を整理する。 ・整理したものを使い、TV電話を使って石嶺小学校の2年生に対して発表を行う。	・ビデオレターを使って町探検で得た気付きを交流し合う。 ・質疑応答ではTV電話を使う。 ・ビデオレターの感想を手紙で交換し合う。	・「大きな声で」や「はっきりと」など、交流校に伝えるように発表の仕方や話し方を工夫させる。 ○ビデオレター作成時には相手によく伝わるように、声の大きさや掲示の仕方などを考えさせる。

図3 遠隔交流学習を取り入れた「町となかよし」の単元指導計画(例)

たちの課題決りを十分待ち、課題解決をさせる時間も確保する計画を立てることが重要であると考え。このことにより、子どもたちの表現意欲も高まることになる。また、纏めをコンピュータで行うため、ワープロでの文字入力、写真や音声の取り込みなど、コンピュータを操作する技能を十分時間をとって高めたいと感じている。

5. おわりに

従来の学習指導要領の特色は、「必要に応じて手紙や電話などを用い伝え合う活動についても工夫すること」という文言が、生活科指導計画の作成と内容の扱いに入ってきたことである。低学年の生活科もこうした大きな「時代のうねり」、情報とコミュニケーション教育の流れの中に位置付けなければ、教科としても生き残れない時代である。情報の発信とかコミュニケーションというと「私の興味・関心や問題意識を素直に伝えよう」「私たちの体験をみんなにも広げよう」というようなことが優先されがちである。もちろんそれらは大事なことではあるのだが、その前に相手にわかる情報を送り、相手と情報を共有し、そこから新しい問題への発展につなげていくこと、このことが意識されてないと交流は長くは続けられない。何でもないことのようにだが、これがコミュニケーションの原点であり、極意でもある。もう一段進むと、双方が共通の問題意識・課題の共有をして、何かを調べる、何かをつくるというような活動に高まる。

尚、本研究において全体的な企画・論文のまとめを久世が行い、映像の撮影並びに分析指導を齋藤が行った。米須、岸本、二ノ宮は実際に撮影と授業計画作成を行った。

本研究は文部科学省の科学研究費補助金基礎研究(B) (課題研究番号 20300278) を受けて進めていることを、感謝をもってここに付記する。

参考文献

- 1) 編者：関浩和『社会科の指導計画作成と授業づくり』
2009年9月発行者：藤原久雄
発行所：明治図書出版株式会社
- 2) 編者：中村哲『伝統や文化に関する教育の充実—そ

の方策と実践事例—』

平成21年7月1日発行者：福山善弘

発行所：(株)教育開発研究所

- 3) 齋藤・久世・松本・嘉手苺：「学習者の目的に応じた多視点映像教材の開発研究【VI】—新学習指導要領と伝統文化教材—
日本教育情報学会 教情研究EI09-3 (2009-07) P21-28
- 4) 小学校新学習指導要領
文部科学省ホームページ
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/index.htm
- 5) 「2009～2010年版 新学習指導要領完全対応最新教育基本用語」
小学館 横山英行編集 2009年初版
- 6) 齋藤・久世・松本・嘉手苺：「学習者の目的に応じた多視点映像教材の開発研究【VI】—新学習指導要領と伝統文化教材—」 日本教育情報学会 教情研究EI09-3 (2009-07) P21-28
- 7) 池野, 小原, 棚橋, 升原, 阿部, 若杉,, 宮本, 井上, 宇都宮, 李, 田口, 大國：「中学校授業における開発DVD教材「郷土の伝統文化」の効果性の研究(1)」
学部・附属学校共同研究紀要 no. 37 page. 211-216 (20090331)
- 8) 池野, 小原, 棚橋, 草原, 川本, 有田, 阿部, 若杉, 宮本, 井上, 宇都宮, 李：「中学校授業における開発DVD教材「郷土の伝統文化」の効果性の研究(2)」
学部・附属学校共同研究紀要 no. 38 page. 281-287 (20100331)